

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 9 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381218

研究課題名(和文) 大学学術的文章作成授業履修者の文章作成力向上と付与されたコメントの関連

研究課題名(英文) The Relationship between Students' Writing Improvement and Written Comments in a University Academic Writing Course

研究代表者

佐渡島 紗織 (Sadoshima, Saori)

早稲田大学・国際教養学院・教授

研究者番号：20350423

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：大学学術的文章の作成授業(8週間、8回)において、画面を視聴して課題文章を書く群と画面を視聴せずに課題文章を書く群とでは、画面を視聴した群が有意差をもって文章作成力を伸ばしていた。また、簡潔なコメントを与えた群と詳細なコメントを与えた群とでは、文章作成力の伸びに差が見られなかった。

授業を受けたあとで専門科目のレポートを書いた群と授業を受けずに専門科目のレポートを書いた群とでは、「緻密さ」と「内容」において、授業を受けたあとの群のレポートが有意差をもって優れていた。「構成」では、差が認められなかった。専門課程に入る手前の学生の学術的文章力を因子分析によって整理した。

研究成果の概要(英文)：Two experiments were conducted using an ondemand university academic writing course, which provides eight lessons during eight weeks. The writing improvement of the group of students that observed the lessons before they wrote the assignments exceeded the group that did not observe the lessons before they wrote the same assignment papers. There were no significant differences between the groups who received simple comments and the group who received detailed comments including reasons. To investigate the effectiveness of the above course, the quality of students' term papers in a commerce course were evaluated. The writing quality of the students' papers who took the above writing course in advance exceeded the students' papers who did not take the writing course in advance in elaboration and content, but there were no significant difference in organization. The writing ability of university first year and second year students were analyzed by using the method of factor analysis.

研究分野：国語教育、文章作成教育、大学学部横断型文章授業

キーワード：大学学術的文章作成授業 授業画面の視聴 簡潔なコメント 詳細なコメント 専門科目レポート 大学学術的文章作成力の構造 因子分析 学部横断型文章授業

## 1. 研究開始当初の背景

早稲田大学においては、2008年度より、分野横断型オンデマンド初年次生向け学術的文章作成授業「学術的文章の作成」が開講されてきた。8週に亘る、週1回、1単位の授業である。本授業は、教員が大学院生に研修を施し、それら大学院生が実際の指導を行うという、珍しい二重体制の授業である。

本授業では、毎回の授業で、400字または500字または600字の課題文章を課す。その回で学習した文章技能を文章に反映させて書くという課題である。この課題に対し、研修を受けた大学院生たちが、クラスを受け持ち個別文章指導を行う。文章指導では、予め決められた採点項目があり、大学院生たちはそれら項目に沿ってコメントを付与し採点をする。しかしながら、回ごとに異なる文章技能を使った文章が提出され、また履修者の癖や習慣も異なるため、コメントの出し方というものには定型がない。そのため、コメントを付与する大学院生たちは、どのようなコメントを付与することが効果的であるのか、常に探りながら文章指導を行っている。

また、全学11学部のうちの3学部は、本授業を必修科目と指定しすべての初年次生が履修することになった。しかし、初年次のうちに履修して学習した文章技能が、その後、どのように生かされているかの検証は行っていない。

さらに、コメントの有効性や文章技能の活用効果を測定するためには、信頼性、妥当性のあるルーブリックが必要となる。本研究グループでは、指導の効果を測定するために、2011年に開発したルーブリックがあるが、そのルーブリックは経験に基づいて作られたものであった。<sup>注1</sup>そのため、客観的な方法でルーブリックを再開発する必要があると考えた。

そこで、本助成金を使って、次の四つの研究を行った。

### 〔研究A〕

コメントの詳しさによって、文章作成能力の伸びに差がでるか否かを調査した研究。

### 〔研究B〕

授業画面を視聴し、毎回の課題文章についてコメントを付与されるといふ本授業のそもそもの指導効果を測定する研究。

〔研究C〕「学術的文章の作成」授業履修者と非履修者が、専門科目において書いた同一課題のレポート文章の質に違いがあるか否かを調査した研究。

〔研究D〕因子分析を使って初年次生と二年次生の文章作成力の構造を探った研究を行った。

以下、それぞれの研究ごとに目的と方法と成果を報告する。

## 2. 研究目的

〔研究A〕コメントの詳しさによって、文章作成能力の伸びに差がでるか否かを調査した研究

すでに学内で始動している、オンデマンド学術的文章作成授業の画面を利用して実験を行い、コメントの種類と文章作成力向上との関係を調査した。コメントの種類では、簡潔なコメントと詳細なコメントのどちらが有効であるかを比較した。

〔研究B〕「学術的文章の作成」授業履修者と非履修者が、専門科目において書いた同一課題のレポート文章の質に違いがあるか否かを調査した研究

早稲田大学で開講されているオンデマンド学術的文章作成授業では、毎回の授業で45分から60分間の講義が行われる。講義では、個々の文章技能がどのような働きをしているかという解説を行う。この授業画面を視聴せずに課題画面だけを観て文章を書き、提出する履修者がいる。そこで、授業画面の視聴と文章に対する個別指導が、文章作成力向上に果たして効果を与えているかを調査した。すなわち、こうした形態をとる本授業の効果があるか否かを調査した。

〔研究C〕「学術的文章の作成」授業履修者と非履修者が、専門科目において書いた同一課題のレポート文章の質に違いがあるか否かを調査した研究

本学部横断型の学術的文章作成授業では、文章内容そのものの評価は行わず、書き方に着目した評価を行っている。つまり、授業の目的は、思考を整理し明確な文章を書くための技能を身につけることである。この授業を履修した後、学生が専門科目の授業でレポートを書いた際には、本授業での学習が効果を及ぼしているかを調査した。

〔研究D〕因子分析を使って初年次生と二年次生の文章作成力の構造を探る研究

学術的文章作成能力を評価するためのルーブリックが様々に開発されている。多くは、文章作成授業を担当する教員が担当授業の中で使用することを目的としたもので、使用範囲が限られているうえ、経験に基づいて開発されている。代表者と分担者も、経験に基づいてルーブリックを作成し、このルーブリックを使って研究調査を行ってきた。本研究では、より客観的な方法である因子分析を行い、ルーブリックの素地となる、文章作成能力の構造を探る。学生が専門分野の学習に入る手前の段階、すなわち初年次生と二年次生における学術的文章作成能力を研究対象とした。

### 3. 研究方法

#### 〔研究A〕

付与するコメントの詳細さが異なる二つのグループを比較する実験を行った。実験参加履修者のうち、一方のグループには、その回の課題で 求められている文章技能ができていないか否か のみの簡潔なコメントを8週間与え続けた。もう一方のグループには、求められている文章技能ができていないか否かに加えて、どのようにできているか、どのようにできていないか、なぜその技能が大切なのか、修正するにはどのように考えたらよいか などの詳細なコメントを8週間与え続けた。履修者には、必ず、前の課題文章に付与されたコメントを読んでから次の課題に取り組みよう促した。

両グループに同じ文章を作成させるプレ作文とポスト作文を書かせ、文章作成力向上を測った。プレ作文とポスト作文の文章作成力は、本ライティング・プログラムが開発した評価票を用いて測定した。<sup>注1</sup>平成26年度に行った実験では、途中棄権者が多く出てサンプル数が不十分となったため、同じ授業画面を使った実験を平成27年度にも行い、両者を合わせる形で結果を出した。合計で31名の実験参加履修者を得ることができた。

また、文章作成力向上の測定に加えて、一部の実験参加履修者には個別インタビューを行い、付与されたコメントについての感想を聞き取った。実際に返却された8編のコメント付き文章を前にして、コメントについての感想を述べさせた。

注1 太田裕子・佐渡島紗織・富永敦子・齋藤綾子(2012)「大学初年次日本語アカデミック・ライティング授業における帰国生と留学生の文章力 初回課題と最終回課題の文章評価調査から」『Waseda Global Forum』8, pp.337-375

#### 〔研究B〕

授業画面を視聴せず、課題画面だけを観て文章を書き、その課題文章には点数だけが付与されて返却されるというグループと、通常求められているように、授業画面を視聴してから課題文章を書き、課題文章には点数と吹き出しコメントが付与されるグループとで文章作成力の伸びを比較した。

〔研究A〕と同様、プレ作文とポスト作文を書かせて文章作成力の伸びを測定した。

#### 〔研究C〕

本授業が必修科目となる前の1年生72人と本授業が必修科目となった後の1年生72人が、同一の専門科目において書いた同一課題レポートの得点を比較した。

この科目は、商学部の授業で、オンラインでレポートの提出を課しているため、担当教

員と学生に文章を使う同意を得て文章を使用することができた。レポート課題は、指定された複数の企業の中から1社を選ばせ、その企業戦略について2000字程度にまとめさせるといったものであった。

レポート文章は、評価者に訓練を施した上で、すでに開発されていたループリックを使い、「緻密さ」「構成」「内容」の3観点6段階で全体評価を行なった。

#### 〔研究D〕

学生が専門分野の学習に入る手前の段階での日本語学術的文章作成能力を測定するための評価項目を網羅するために、複数の資料から評価項目を収集した。収集した121項目で重なりを整理すると35項目の文章評価項目が抽出された。この35項目を使って、初年次生と二年次生の書いた384編の学術的文章を6人の評価者に評価させ、この結果を因子分析した。

### 4. 研究成果

#### 〔研究A〕

二グループ間では、有意な差が認められなかった。コメントが 求められている文章技能ができていないか否か のみの簡潔なものであっても、どのようにできているか、どのようにできていないか、なぜその技能が大切なのか、修正するにはどのように考えたらよいか などの詳細なものであっても、文章作成力の向上には違いは見られないという結果となった。実験参加履修者に対するインタビューからは、いくつかの示唆が得られた。コメントの詳細さは、書き手の読み書き能力により影響力が異なるのではないかという点が挙げられる。読み書き能力の高い書き手によれば、簡潔なコメントの方が「なぜか」「どうしたらもっとよくなるか」を自身で考える契機となるという。また、文章技能によって、コメントが簡潔であるほうがよかったり、詳細であるほうがよかったりすることも考えられる。全体構成のような、より内容に関わる文章技能では、なぜ、どのようにすればよいかの助言は役立つという反応があった。

#### 〔研究B〕

二グループの文章作成力の伸びを比較したところ、有意差をもって、授業画面を視聴し、コメントが付与されたグループの方が文章作成力が伸びていた。文章技能は、単に使うよう指示するばかりでなく、なぜどのように使うかの解説を予め行い、またフィードバックしてこそ文章作成に反映させることができるようになるものであると明らかになった。

ただし、本調査では、授業画面による解説と吹き出しコメントによる解説のどちらが文章作成力の向上に影響を与えたのかは不

明である。本授業においては、今後、課題文章を書く前に授業画面を学習すること、そして全回に提出した文章に付与されたコメントを読むことが文章作成力の向上につながると、履修者に周知することが有効である。

#### 〔研究C〕

二つの学年で提出されていたレポート文章は、「緻密さ」と「内容」で有意な差が認められたが、「構成」では差が見られなかった。レポート課題の性質上、構成に工夫の余地がなかったことが原因と思われる。

学部横断型の学術的文章作成授業において学習した学術的文章作成技能は、専門科目レポートの文章作成にも活かされているとみることができる。明確に書くことを学習させる学部横断型の学術的文章作成授業での学習効果が、内容においてもみられることが示唆された。ただ、個々の文章を分析しているわけではないため、文章作成技能がレポート文章でどのように活用されたかは、本研究では解明していない。

#### 〔研究D〕

因子分析を行った結果、文と語句、内容、段落、全体構成、参考文献の5因子構造が抽出された。

第1因子「文と語句」に含まれる項目は、多義にとれる助詞の「の」がない 化・的・性・観のつく語 分かりにくい外来語がない 分かりにくい指示代名詞や代名詞がない 主語と述語の合っていない文がない 接続表現 複雑で分かりにくい文がない 語句に「揺れ」がない 専門用語や特殊な用法で使っている語句が定義されている 誤字脱字がない であった。

第2因子「内容」に含まれる項目は、主張や論証の仕方に独自性がある（一般に良く言われるような事柄をなぞっていない）、内容の設定範囲が適切である、レポートの文章全体が、示された目的または問いに沿っている、題名と内容が合っている、課題に答えている であり、文章を書く前、書いた後に行われる内容に関する検討についての記述である。

第3因子「段落」に含まれる項目は、トピック・センテンスまたは中心文が全体に意識されて示されている 段落ごとの論点が整理されている 一文一文が論理的に積み重なっている 根拠が適切に示されている 主張が明確に示されている であった。

第4因子「全体構成」に含まれる項目は、序論で示された目的と結論が呼応している 結論で、取り上げられた議論のポイントが要約されている レポートの目的または問いが、序論で示されている 序論、本論、結論に分けられている であった。

第5因子「参考文献」に含まれる項目は、参考文献リストの書式が適切である 参考文献にたどり着くことができるだけの情

報が明示されている 本文における引用の形式と出典提示の形式が適切である 不適切な参考文献を使っていない であった。

この5因子構造は、文章の着目点をマクロミクロで表したものととらえることができる。因子「内容」は内容そのものを測るのではなく、「内容のあり方」を測るものである。この5因子による学術的文章作成力の構造は、大学初年次や2年次で開講する学部横断型の学術的文章作成授業展開を考案する際に役立つ。また、専門科目の手前で書かせる学術的文章の出来栄を評価するルーブリックの開発に使うことができる。

今後は、この5因子構造をもとに、妥当性の検証を行いながらルーブリックを開発する。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

佐渡島紗織、宇都伸之、坂本麻裕子、大野真澄、渡寛法「初年次アカデミック・ライティング授業の効果 早稲田大学商学部における調査」『大学教育学会誌』査読有、37(2)、2015、pp.154 - 161

佐渡島紗織、坂本麻裕子、宇都伸之、渡寛法、大野真澄、外村江里奈、中島宏治「因子分析による学術的文章作成力の構造解析」『リメディアル教育研究』査読有、11(2)、2016、掲載決定

〔学会発表〕(計1件)

坂本麻裕子(代表)「初年次オンデマンド・ライティング授業で有効なコメントの性質 早稲田大学における実験調査」日本リメディアル教育学会第12回全国大会(2016年8月25日)、大阪国際大学(大阪府守口市)

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

佐渡島紗織 (SADOSHIMA, Saori)  
早稲田大学・国際学術院・教授  
研究者番号：20350423

### (2)研究分担者

太田裕子 (OTA, Yuko)  
早稲田大学・グローバルエデュケーションセンター・准教授  
研究者番号：50434353

坂本麻裕子 (SAKAMOTO, Mayuko)  
早稲田大学・グローバルエデュケーションセンター・助教  
研究者番号：40648317

宇都伸之 (UTO, Nobuyuki)  
早稲田大学・政治経済学術院・助手  
研究者番号：30755963

外村江里奈 (SOTOMURA, Erina)  
早稲田大学・グローバルエデュケーションセ  
ンター・助教  
研究者番号：00732942

渡寛法 (WATARI, Hironori)  
早稲田大学・グローバルエデュケーションセ  
ンター・助手  
研究者番号：20732960

大野真澄 (ONO, Masumi)  
慶應義塾大学・法学部・講師  
研究者番号：50704657

ドイル綾子 (DOYLE, Ayako)  
早稲田大学・オープン教育センター・助手  
研究者番号：80595835